

博士論文審査及び最終試験の結果

学位請求者 野平宗弘

学位請求論文 ファム・コン・ティエン研究序説

審査委員（主査）西永良成

（副査）西江雅之

西谷修

川口健一

水野善文

《審査の結果》

ベトナム出身の亡命作家・思想家・詩人ファム・コン・ティエン（1941年—）の人生・思想・詩作をめぐる、おそらく世界初の本格的論考であり、その学問的功績は対象作品へのアプローチ、関連領域への目配り、記述の緻密さ・説得力などにおいてまことに多大なものがある。審査委員会は論文審査及び最終試験のいずれにおいても申請者の稀に見る力量と見事な達成を高く評価し、全員一致で申請者に博士（学術）の学位を授与することとした。

《論文の概要》

野平氏の画期的な論文は、極めて難解でありながらも強烈な魅力をもつファム・コン・ティエンの思想・文学の全体像を提示することを主眼とし、5部から構成されている。以下、順番に各章の概要を述べる。

第一章「ファム・コン・ティエンの人生とその時代」では、フランスによる植民地化から現代にいたるまで、近代世界に組み込まれてきたベトナムの歴史の概観のあと、1941年ベトナム南部の町ミイトーに生まれて以後、第二次世界大戦、第一次インドシナ戦争、ベトナム戦争と相次いだ戦争の時代を彼がどのように過ごしたのか、さらにベトナム戦争以降の彼がなぜ亡命作家となら

ざるを得なかったのかという事情を、ファム・コン・ティエンのテキストおよび従来のベトナム批評家たちの評価を参照しつつ、時代順に概説したものである。ここではいかなる困難があろうとも、あくまでみずからの自由を貫徹する作家の強靱な姿が達者な筆で活写されているが、とりわけ印象的なのは、ファム・コン・ティエンのことを「ベトナムのランボー」と呼んだヘンリー・ミラーとの深い本質的な交流の重要性を野平氏がはじめて指摘されたこと、またエピソード的に開高健との邂逅について興味深く述べられていることであろう。

第2章「ファム・コン・ティエンにとってのハイデガーと禅」は、ティエンがベトナム戦争を思想的にどう考えていたのか、なぜベトナム戦争を考えたときにハイデガーの思想を引き合いに出す必要があったのか、さらにすすんでティエンがそのような根拠に基づいてハイデガー思想を禅と関連させたのかが問われる。そして、ティエンがベトナム反戦思想は戦争をおこした相手側と同じく形而上的な表象的世界観に立脚したものであり、双方ともにハイデガー的意味における「存在忘却」に陥っている点で同根源的なものに他ならない、従って問題の根本的な解決にはならないと見なしたこと、そして真に問うべき問題は「存在者」ではなく、「存在 Sein」なのであり、この関連でハイデガー思想を禅の観点から捉え直し、その相対化をも図って見せたことを明らかにする。ここではティエンが語源に遡って、Sein を「存在」「有」ではなく、「性」と訳すことで、西洋形而上学には基づかない東西思想の対話の可能性を切り開いたことが厳密に論証されている。

第3章「『深淵の沈黙』の読解」では、ティエンの思想がもつともまとまったかたちで表現されている、難解だが遠大な思想書『深淵の沈黙』の精緻で独創的な読解が披瀝され、「ベトナムの思想は〈越〉と〈性〉である」と考えるティエンが究極的には〈性〉も〈越〉も否定・超越した「深淵の沈黙」、すなわち言語的には無分別な状態であり、釈迦の沈黙にも通じる境地に達したことが明らかにされる。併せてこのようなティエンの大乗仏教・禅的な思想は久しく忘れられていたベトナムの伝統にあったものであり、そのことを11世紀の空路禅師らの思想と結びつけて考察している。なお、野平氏は周到にも、この『深淵の沈黙』を全訳し、これを論文に付録している。

第4章「Sein, Cai, Con; ファム・コン・ティエン、ヘンリー・ミラー、ハイデガー」ではまず、ティエンとミラーの思想的対話がハイデガー・禅的問題を下地にしていること、またティエンの「ハイデガーの Sein はミラーの Cunt で

ある」という大胆な命題の意味を考察し、リアリティーのカオス的生成を考えるミラーと Sein をカオスから発現するピュシスと捉えるハイデガーとの類縁性によってこれを説明できること、さらにティエンがミラー、ハイデガーらの根源的なピュシスをティエンが平易なベトナム語の類別詞カイ（母）、コン（子）を用いても表現しえていることなども詳述されている。

第5章「ファム・コン・ティエンにとっての詩と創作」では、みずからを「詩人」と称しているティエンの文学的実作が分析されている。とはいえ、ティエンにとっての詩は万物の根源的発現、ハイデガーのピュシスのようなもの、あるいは1930年代に夭折したベトナムの詩人ハン・マック・トゥーの言う「透明な源」のようなものであるという観点から、ティエンの小説『太陽などありはしない』、『蛇の生まれ出づる日』、詩「ミイトーの大河」「虚空のための詩」代表作品などが詳細に検討され、考察されている。

野平氏はどの章も緻密かつ充実し、説得力に富む以上の5章により、破天荒な奔放さで行動、思索、創作するファム・コン・ティエンの独創的な世界像をきわめて魅力的かつ刺激的に開示することに成功されている。

《審査の概要》

本学位論文の公開審査は書類審査を経て、昨年12月9日におこなわれた。審査員から提出された評価・疑問は概略次の通りである。

・評価すべき点

- 1) このような難解だが魅力に満ちた思想家・詩人に着目し、長年にわたってほとんど独力で研究を開発、進展、深化させた情熱、研鑽はむろん、その結果として独自の文体をもつにいたるまでの労作を完成しえたこと。
- 2) ファム・コン・ティエンの言語的な営みを国際的そして国内的、さらには歴史的な文脈に位置づけ、その独自性、重要性をほとんど衝撃的なかたちで提示し得たこと。
- 3) 野平氏が提示してくれたティエンの思考はたんに学術論文にとどまらず、そのまま現代人に鋭い問題提起をおこなう本質的な著作になりえていること。

・疑問点

- 1) 引用されるサンスクリット語にいくらかケアレスマスがみられること。
- 2) ティエンは（戦争をふくむ）すべてを「西洋形而上学」や「表象的思考」の帰結と見なして、仏教思想にその「乗りこえ」の契機を見るが、彼がキリスト教を問題にしないことをどう考えるのか。また、ベトナムの仏教思想は「禅」に集約されるのか。
- 3) この論文には若干言及されていはいするが、もっと詳細に論じられてもよかったティエン自身の著作（たとえば『グエン・ズー：民族的な大詩豪』（1996年））があったのではないかと、さらにベトナム近代文学での位置づけがやや不十分だったのではないかと。

以上の評価すべき点および疑問点について、学位申請者に補足的な説明をうけ、審査員が審議した結果、この稀に見る質をもつ論文を最大限に評価し、博士（学術）の学位に値するのみならず、野平氏の今後の研究の将来性について大いに期待が抱けるという認識でも委員会は一致した。